２０２５/１２/２８　　礼拝メッセージ　　近藤 崇志　牧師

主　　題 ： 約束を守られる主⑤：『新しい天と新しい地』
聖書箇所 ： ヨハネの黙示録２１章１－４節

早いもので今年も最後のメッセージになりました。この朝も皆さんと、みことばを通して偉大な神様について一緒に考えてみたいと思います。これまで４週にわたりクリスマスシリーズとして、ともに考えてきたイザヤ書の中にこのようなことばが記されています。イザヤ６５：１７「**見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。**」と。ここに神様のすばらしい約束がなされていました。将来、必ず成し遂げられる出来事が預言されていました。これまで約束を守り続けて来た主が宣言されていたわけです。「**わたしは新しい天と新しい地を創造する。**」と。私たちが聖書を開く時、そこには数多くの約束を見て取ることができます。既に成し遂げられてきた過去の約束もそうです。今回のシリーズでもその一部を見ました。「**インマヌエル**」と呼ばれる男の子が与えられるという約束は、確かに、ひとりの「**処女**」を通して与えられました。「**不思議な助言者、平和の君**」と呼ばれるみどりごが生まれるという約束は、確かに、飼葉おけに寝かされた赤ん坊を通して成就しました。今から約２０００年前に生まれ、私たちの背きの罪と咎のために刺し通され、砕かれたイエス様こそ、確かに、主の約束を成し遂げられた世の救い主だったわけです。

また、過去の話や過去の約束だけではありません。同時に聖書には、これから成し遂げられる未来の約束というものも多くあふれています。約束を果たされ続けてきた神様は、この先に何が起こるのか、その詳細を私たちに明らかにしてくれているわけです。それは何のためでしょう。なぜ神様は、過去に起こったことだけではなく、今起こっていることだけではなく、将来起こることに関しても、今の私たちに教えてくれているのでしょう。その一つの答えは、悲しみや苦痛にあふれているこの世を歩む私たちが希望を失わないためです。未来に関する教え、これは単に、聖書を学ぶことが好きな人たちだけが知っていれば良い余分な知識ではありません。未来に関することは、人々の間で、ただ議論するだけの情報でもありません。未来の約束というのは、この世で生きている私たち信仰者ひとりひとりにとって、常に希望をもたらしてくれるものです。目の前に、まさにさまざまな困難やいろいろな苦しみ、自分の手に負えないような問題が降りかかってくる時、その先に目を移させて、その中にあってあきらめずに忠実に歩み続けることができるようにと、私たちを支え、励まし、力づけてくれるものです。

かつての信仰の勇者たちもみな、そのようにして生きていました。たとえばモーセ、エジプトで奴隷になっていたイスラエルの民を助け出し、荒野でも民を導いた彼を支えていたのも将来の約束でした。ヘブル１１：２４－２６に「**:24 信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、:25 はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。:26 彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。**」と書かれています。彼は苦しむことを選びました。それは、先にあるものに彼が目を留めたからです。モーセだけでなく、パウロも同じです。多くの痛みや迫害を経験した彼が、勇気を失うことがなかったのも、後にやって来る約束に目を留めていたからでした。彼のあかしも、Ⅱコリント４：１６－１８に記されています。「**:16 ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。:17 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。:18 私たちは見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。**」と。「**見えるものは一時的**」なのだと。見えないものこそ、先にやって来るものこそ、永遠に続くものなのだと。パウロもそのことを覚えて、この世で忠実に励み続けました。

またこの点に関して、キリスト教の精髄を書いた著者Ｃ・Ｓ・ルイスも次のようなことばを残しています。「歴史を紐解けば、この世に大きな影響を与えたキリスト者ほど、来るべき世界のことを最も真剣に考えていたことが分かります。使徒たち自身も、中世を築いた偉大な者たちも……彼らはいずれも、心を天に向けていたがゆえに、この地上に確かな足跡を残したのです。」と。モーセやパウロにしても、これまでの信仰者にしても、この地上において、喜びや勇気、感謝を失わないために、未来の約束に目を向け続けていました。彼らでさえ、それが必要だったわけです。それなら今の私たちはどうでしょう。今の私たちにとっても、これは欠かせないことになります。

改めて自分自身に問いかけてみてください。自分がこの地上での生涯を終えた時、いったい何を楽しみにしているでしょう。日々の生活を生きています。いつか死を迎えるとわかっています。その後のことを考えるのであれば、何を心待ちにしながら生きているでしょう。どのような将来を覚えて歩んでいるでしょう。将来に関することがあやふやで、よくわからないと言う人もいると思います。私も以前は、永遠を過ごすと言われている天国は、古い友人と再会して、みなで真っ白な雲の上に乗って、いつまでも主を賛美している、ただそれだけの味気のないようなイメージを持っていました。しかし、そうではありません。みことばはすべての信仰者を待ち受けている未来というものを、はっきりと描いています。神様は、私たちが目を留め続けていくべき将来の現実が、あまりにもすばらしいものであると教えてくれています。今年最後の礼拝、すべての信仰者にとって最後に待っている、用意されている約束である「**新しい天と新しい地**」について一緒に考えてみましょう。この約束が、最も明白に見られる聖書の最後の本、ヨハネの黙示録２１：１－４を見たいと思います。この箇所から「信仰者に約束された三つの将来の希望」を見て取ることができます。どのような未来の希望に、私たちは目を留めるのか、いつものようにみことばをお読みします。

ヨハネの黙示録２１：１－４

「:1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

○『新しい天と新しい地』：約束を守られる主にある“将来の希望”

１．見たことのない新しい天と地が与えられる　１節

最初の希望から考えてみましょう。信仰者に約束されている一つ目の希望は「見たこともない新しい天と地が与えられる」です。もう一度、１節をよく見てください。このように始まっていました。「**また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。**」と。

▶「新しい」

まず注目してほしいのは、くり返されていた「**新しい**」ということばです。「**新しい天と新しい地**」と言われていました。ここで使われている「**新しい**」とは、もともと時間的な意味よりも、本質的な意味での新しさを表わす意味が含まれていました。言い換えれば、これは単に、前の古いものがアップデートされて少し良くなったという話をしているのではありません。これは、前の古いものとは根本的に違う、全く異なる新しいものであることを表していました。この先にやって来る「**新しい天と新しい地**」は、だれも見たことのないような「真新しい」ものになるというわけです。但し、この「真新しい」というのもこの世にあふれているような「真新しさ」ではありません。テレビで流れるＣＭで一度は聞いたことがあるかもしれません。「史上最高の○○」、「まだ見たこともない○○」といったキャッチコピーです。たとえば、多くの人が持っている iPhone の歴代のキャッチコピーを調べてみると、このようなものがありました。

「史上最高の iPhone」、「新世代の iPhone」、「未来をその手に……」など、キャッチ（広告などで人を惹きつける意味）だと思いませんか。多くの人たちは、このような謳い文句を耳にして、その「真新しさ」に惹かれて商品を購入したりします。実際、そのようにして届いた新しい商品を手にした時は、今までに見たことのないような「真新しさ」に戸惑いながらも、嬉しくワクワク、ドキドキしたりするわけです。しかし、それが数か月後、１年後にはどうなるでしょう。また新しいものが出てきます。おもしろいと思いませんか。一度、史上最高と言われていたものが史上最高ではなくなるわけです。新世代に続く、次の新世代が現れます。終わりがないわけです。この世にあふれている「真新しさ」というものは一時的で、常に更新され続けていくわけです。

この箇所で言われている「**新しい**」ものとは、そのようなものではありません。やがてやって来る「**新しい天と新しい地**」は、その後、何度も何度もアップデートを必要とするものではありません。将来現れるその「**新しい天と新しい地**」というのは、今の世界とは根本的に違っていて、これまで見たこともないような美しい真新しさを伴った完全なものだということです。もうこの先、変わることがない完全な世界です。今の古い世界は、いつかすべて過ぎ去り、全く新しい最高のものがやって来るわけです。それがすべてを支配しておられる神様が持っておられる計画でした。

改めて、思い出してみてください。私たちは、創造主である神様が、ことばでもってこの世界をすべてを造られたことを知っています。私たちは今、まさにこの聖書の終わりから二つ目の章を見ていますが、聖書の初めの２章を読んでみれば、そこには神様がただ、ことばをもってすべてのものを完全なものとして造られた姿を見て取ることができます。創世記の最初の２章でくり返し言われていたことを覚えていますか。最初に「光」を造られた神様は、その光を見て何と言われましたか。「**神は光を見て良しとされた。**」と創世記１：４に書いています。その後も同じです。神様は、造った海を見て、造った草木を見て、造った魚を見て、造った鳥を見て、それらのものを「**……良しとされた。**」とあります。極めつけは人を造られた後、すべてのものをご覧になって「**非常に良かった。**」と言われました。文字どおり神様の造られた当初の世界は、何の汚れもない良いもので、完全なものだったわけです。それが最初の２章でした。しかし３章に入るとそれが一変しました。アダムとエバが罪を犯して、この世に罪が入り、その結果として彼らだけでなく、この世界のすべてが呪われたものとなりました。被造物のすべてが、この時から苦しみと痛みのもとに置かれるようになったわけです。創世記の３章から、被造物はずっと苦しみのうめきの中にいます。この様子をパウロはローマ８：２２でこのように述べています。「**私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。**」と。完全だった世界は一度、罪によって汚れました。非常に良かった世界は、うめきや悲痛であふれる非常に悪いものになりました。堕落したわけです。しかし、その堕落が遂に終わりを迎えるというわけです。黙示録の２３章はもう存在しません。以前の古いものはすべて過ぎ去って、全く新しい天と、全く新しい地が、いつの日かやって来るというわけです。神様は、そのすべての計画を罪が起こったタイミングから持たれたのではありません。その以前からすべて計画されていました。

▶**「もはや海もない」**

「**新しい天と新しい地**」とは具体的にどのような様子なのでしょう。その一つの特徴をヨハネはここで教えてくれました。１節の最後にこのように書いています。「**以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない**」と。「**海もない**」とはどういうことだと思いますか。この点に関しては、さまざまな意見があります。ある人たちは、これを文字どおりにとって、新しい世界には大陸や海がなくなると考えたりします。そうかもしれません。今地球の７０％を占めている海はなくなり、全く新しいものに変わるのだと。しかし、聖書全体また同じ黙示録を見てみると、そこにはかつての人々が持っていた海に対する考え方を見て取ることができます。当時の人たちは、海に対していろいろな考えを持っていたわけです。たとえば、海というのは「悪者や敵、悪が現れる危険な場所」として描かれていました。今の私たちには、海と言えば楽

しみに行くところかもしれませんが、当時の人々にとっては悪者や悪が現れる危険な邪悪な場所として描かれることがありました。イザヤ５７：２０にこのように書いています。「**しかし悪者どもは、荒れ狂う海のようだ。静まることができず、水が海草と泥を吐き出すからである。**」と。また同じ黙示録１２：１７－１３：１では、「**12：17 すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行った。:18 そして、彼は海辺の砂の上に立った。13:1 また私は見た。海から一匹の獣が上がって来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。**」と書かれています。海は悪者や危険が出て来るところとしてのイメージが人々の中にありました。またそれに加えて、海は「死者のいる場所」として描かれたりもしました。黙示録２０：１３にこのように書いています。「**海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。**」と。ですから、聖書が描いている海というのは破壊や破滅をもたらす危険で恐ろしいものでもあったわけです。そのような海が、もうなくなると言われていました。「**もはや海もない**」のだから、私たちを悩ませ、苦しめるような悪者や敵はいません。私たちに悲しみや痛みをもたらす悪というものがいっさい存在しません。私たちを脅かすような海がもう存在しないから、私たちは罪の存在にさえ怯えることはありません。そんな日が、いつか必ずやって来るのです。以前のものは過ぎ去って、新しく訪れる新しい天と地にあって、私たちはもう何の恐れも抱く必要はなく、平安のうちに生きて行くのだと。それは一時的ではありません。永遠に続く真新しい喜びの中で、私たちが生きて行くことが、神様が与えてくれた将来の希望でした。よく覚えておいてください。イエス様を信じて救われている者であればみな、この現実に向かって、一日一日、足を進めているということです。私たちが向かっている先、私たちが最終地点として目指しているところは、この「**新しい天と新しい地**」です。この世は私たちの最終目的地ではありません。

今、私たちが置かれているこの世は、喜びの最高地点、最終地点にたどり着くまでの単なる通過点にしか過ぎないのです。しかしながら、その単なる通過点に心を奪われ過ぎてはいないでしょうか。この世に宝を積むことに必死になっていないでしょうか。私たちの本当の住まい、本当の最終地点である天に宝を積むことに熱心でしょうか。『天国』という本を記したランディ・アルコーンという人物も、このようなことばを残しています。「地上に宝を蓄える者は、その宝から遠ざかる人生を生きています。彼にとって、死は失うことです。けれども天に宝を蓄える人は、永遠を見据えて生きています。その人は日々、自分の宝へと近づいています。彼にとって、死は益です。宝に向かって生きる人には、喜ぶ理由があるのです。あなたは絶望しているでしょうか？それとも喜んでいるでしょうか？」と。死が近づくにつれて、いろいろなものが失われていく中にあって、私たちは多くのものを得ていると考えているでしょうか。私たちは、悪に満ちたこの世にあっても、喜びを失うことはありません。希望を持って生きて行くことができます。将来、以前の天と地は過ぎ去って、見たこともないような美しい新しい天と地が与えられる日が来るからです。それが一つ目の希望でした。

２．神様とともに住む永遠の住まいが与えられる　２－３節

次に二つ目の希望です。信仰者に約束された将来の希望の二つ目は「神様とともに住む永遠の住まいが与えられる」です。救われた者がみな、いつまでも神様とともに交わることのできる新しい都がやって来るわけです。２－３節にこう記されていました。「**:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、**」と。ヨハネはここで凄まじい光景を目にしました。新しい都が神様のみもとを出て、天から下って来ていたわけです。そしてその新しい都は、新しいエルサレムでした。古い罪にまみれたエルサレムではありません。新しいエルサレムというのは、結婚式を控えて夫のために純白に飾られた花嫁のように汚れのない聖なる都でした。もうそこにはいっさいの暗さも

罪もありません。そこに住む住人たちも聖なる者たちだけです。同じ黙示録の３：１２を見ると、だれがその都に住むのか約束されています。「**勝利を得る者**（救われた者）**を、わたしの神の聖所の頭としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上にわたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。**」と。ここで「**神の御名**」、「**新しいエルサレムの名**」、「**わたしの新しい名**」と、「**名前**」を「**書きしるす**」とありました。「名前を書く」というのは今の私たちでもよくわかります。自分の名前を何かに書く時、それが自分の持ち物であること、自分の所有物であることを表します。つまり、天から下って来る神の都、新しいエルサレムの名が記された者たちはみな、神様の所有物として、そこに住む市民権が与えられるということです。キリストの血で贖われ、義とされた神の民はみな、救いにあずかった私たちもみな、この美しい完璧な罪のない都で永遠に住むことになるわけです。

この住まいの何がすばらしいのでしょう。罪や汚れがいっさい存在しないことでしょうか。もちろんそれはすばらしいことです。今の状況からは理解することも想像することもできません。あるいは、あらゆる時代の聖徒がともに集うことがすばらしいのでしょうか。それも信じられないことです。ただ、それ以上にすごいことが書いていました。もう一度、みことばをよく見ると、３節にこのように言われていたわけです。「**見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、**」と。神様の臨在と栄光が現れる「**神の幕屋が人とともにある**」と言われていました。「**神は彼らとともに住み**」と言われていました。要するに、やって来る新しいエルサレム、将来住む都にあって、神様が神の民とともに住まれるということです。神様はもう二度と、その民のもとから離れることはありません。関係を壊してきた罪が完全に取り除かれる以上、すべての信仰者たちが永遠に続く神様との交わりや関係を、いつまでも楽しむことができるというわけです。それが私たちを待っている将来でした。私たちが住むことになる新しい本当の住まいでした。神様がともにいるところに私たちは行くことができるのです。

また少し考えてみてください。今自分は、なぜ天を待ち望んでいるのでしょう。どうして自分は天国に行きたいと思っているのでしょう。果たしてそれは、そこで神様とともにいたいから、何よりも救い主イエス様とともにいたいからでしょうか。それとも仮に、そこにイエス様がいなかったとしても別の何かがあれば満足するようなものでしょうか。かつての信仰者、詩篇の著者はこう告白しました。詩篇７３：２８で、「**しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。……**」と。またパウロも、自分の思いを、Ⅱコリント５：８で口にしていました。「**私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。**」と。これは彼らに限った話ではありません。主の前を忠実に歩んでいたかつての信仰者たちは、どんな時も主とともにいることを願っていた者たちでした。いつの日か主にお会いして、いつの日か救い主と顔と顔を合わせて、いつの日か、いつまでも主と交わりをもって賛美を歌い、感謝をささげる日が来る、それ以上の喜びはないのだと、心から思っていた者たちでした。

今の私たちはどうでしょう。みことばは約束してくれました。将来、私たちは主の住む都にあって、途絶えることのない主との交わりを楽しむことができるのだと。将来、ほかの信仰者たちと一緒に、こんな愚かな私たちのことを選び、義と認め、愛して赦してくださった救い主を賛美して、この方と永遠をともに過ごすことができるのだと。今はまだ、イエス様のことをだれも見たことはないけれど、今はまだ、イエス様のすばらしさを聞いたり読んだりしかできないけれど、将来、この方を自分の目で見て、この方のすばらしさを自分の耳で聞くことができるのだと。この先の希望というのは、今の私たちに大きな楽しみや喜びを与えてくれませんか。早くその瞬間が来ないのかとワクワクする思いをうちに生み出しませんか。そのとおりだと同意するのであれば、その日が来るまで、私たちはどのように歩もうとするでしょう。将来の楽しみに目を向けることはすばらしいことです。しかし将来の楽しみに目を奪われて、今置か

れているこの世での歩みは適当に過ごすのでしょうか。いいえ、この日が必ず来ると知っている者は、喜びが与えられるともうわかっている者は、どんな困難でもあきらめずに、忠実に歩んでいくことができます。この日はかならず来るのだと、主とともにいつまでも過ごす日がもうやって来るのだと、それがわかっている者は、神様の忌み嫌われる罪を捨てて、聖さを愛する者として進み続けていこうとします。

ペテロもこんなことばを残しています。Ⅱペテロ３：１３－１４で「**:13 しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。:14 そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。**」と。本来、御怒りしか値しなかった私たちが、恵みを受けて神様のもとで永遠に暮らすことができるのだということです。その日は一日一日、一秒一秒、確実に近づいています。そうだとするなら、将来の希望から目を離さずに、キリストの姿に似た者となることを求めていくことです。到底足りない神様に対する愛や隣人に対する愛においても、赦しや忍耐においても、仕えることや祈ることにおいても、またこの希望をまだ知らない人たちに宣べ伝えていくことにしても、私たちはまだまだ日々、成長し続けていくことです。

３．完全な慰めが与えられる　４節

最後にもう一つだけ、信仰者に約束された三つ目の希望は「完全な慰めが与えられる」です。４節を見てください。このように書かれています。「**彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。**」と。ここで使われている「**ぬぐい取ってくださる**」ということばは、もともと「何かを洗い流したり拭き取ること」、「消し去ること」、「跡形もなくなくすこと」といった意味が含まれていました。汚れがあったとしても、それを洗い流したり拭き取ることで完全に消し去るというような意味です。興味深いのは、このことばは７０人訳の聖書の中では、あのノアの洪水を描く場面でも用いられていました。この地上に悪が増大するのをご覧になった神様は何をされましたか。洪水でもって悪をさばかれました。創世記７：２３にこう書いています。「**こうして、主は地上のすべての生き物を、人をはじめ、動物、はうもの、空の鳥に至るまで<u>消し去った</u>。それらは、地から<u>消し去られた</u>。ただノアと、彼といっしょに箱舟にいたものたちだけが残った。**」と。神様は何をなされましたか。地上の半分の生き物を残したのではなく、文字どおり、すべてのものを洪水をもって一度洗い流されました。そこにはびこっていた悪は、見事に一度消し去られたわけです。これと同じように、いつか神様は私たちの涙をすっかり「**ぬぐい取ってくださる**」日がやって来ます。私たちに悲しみや苦しみをもたらしていた原因の半分ではありません。私たちの持っていた痛みの一部だけではありません。そのすべてを消し去って、完全な慰め、完全な平安を与えてくださる時がやって来るわけです。それは、今の私たちには、あまり思い描けないことかもしれません。この地上での歩みにおいて、私たちは人それぞれ、さまざまな問題に直面します。体の面でも、年齢に関係なく怪我や傷や病気などを経験します。年齢を重ねればその痛みや苦しみが和らぐのではなく、ますます大きくなり、最後には死を迎えます。例外はいません。どれだけ体に気をつけていても、罪に堕落したこの世を生きている限り、どうすることもできない悲しみや苦しみがつきまとっているわけです。人間関係の面においてもそうです。感謝なことに、神様は恵みでもって私たちの人生にさまざまな人を与えてくれています。愛する肉の家族、学校や近所の友だち、職場の同僚、霊の家族である兄弟姉妹も、多くの人を神様は与えてくださっています。その関係のうちで私たちはたくさんの楽しみや喜びを見出すことが出来ます。しかしそれと同時に、祝福をもたらしてくれるはずの関係が、大きな苦しみをもたらすこともあります。例外なく、みなが罪人であるからこそ、ことばや態度で互いを傷つけ合うことも、ひどい痛みを負わせることもあります。関係が近ければ近いほど受ける痛みは大きくなり、時には修復できないほど関係がこじれることもあります。どれほど私たちが、愛と忍耐をもって接しようと思っていても、罪に堕落しているこの世に生きている限り、どうすることもできない悲しみや苦しみがつきまといます。また、霊的な面でも同じです。救われた喜びと

感謝をもって歩んでいたはずなのに、私たちは日々のさまざまな罪との戦いを経験し、敗北し、罪悪感が心にあふれ、喜びを見出せなくなることもあります。また、信仰ゆえにまわりの人から誤解や非難をされ、いろいろな葛藤を抱き続けているうちに、心のうちには不満が出てきて、あきらめ、投げ出してしまいたい思いが心を支配することもあるでしょう。どれほど神様の前を忠実に歩み、礼拝していようと思っていても、罪に堕落しているこの世に生きている限り、私たちは不完全です。私たちは何度も罪を犯します。私たちには、だれにもどうすることもできない悲しみや苦しみがつきまとっているわけです。しかし皆さん、今の私たちにとって当たり前になっているこれらすべてが、いつの時代も続くわけではありません。これが、終わりを迎える日が来るということです。必ず将来、私たちの目の涙がすっかりぬぐい取られる時がやって来ます。かつて私たちにはどうすることもできなかった病も、死も、争いも、迫害も、叫びやうめきも、困難や苦しみも、もうそこには存在しなくなります。神様とともにいる者の持っている傷はいやされて、悲しみは慰められて、痛みは喜びに変えられる、そんな日がやって来ます。以前のものは、すべて過ぎ去って、やって来る新しい天と地にあって、新しい最高の住まいにあって、私たちは永遠に賛美と感謝にあふれながら、神様とともに生きて行くことができるということです。

これが、これまでも忠実に約束を守り続けてこられた主からの希望でした。「**インマヌエル**」を与えると言われて与えられたお方が、「**ひとりのみどりご**」を与えられると言われて与えられたお方が、「私たちのために砕かれる救い主を与える」と言われて与えられた方が、すべての約束を守られた主が約束してくれているわけです。「**新しい天と新しい地**」がやって来るのだと。将来のこの希望を私たちが覚えるのであれば、私たちはどのように生きて行くでしょう。約束を与えられた神様に、どのように忠実に歩んで行こうとするでしょうか。

牧師のひとり、チャールズ・スポルジョンもこのようなことばを残していました。私自身よく考えさせられました。よく考えてみてください。「クリスチャンは、この世で最も満ち足りた人である。しかし、この世に対しては、最も満足していない人でもある。彼は宿屋に滞在している旅人のようなものだ。宿屋としての快適さには十分満足しているが、そこを自分の家にしようとは、少しも考えない。」と。これは当たり前に聞こえるかもしれませんが、少し思い浮かべてみてください。もし、旅行で泊まったホテルで、隣の部屋の人が朝から必死になっていろいろな家具を運び込む姿を見たら、おそらく不思議に思います。洗濯機、乾燥機、本棚にソファー、掃除機、台所用品など。さらには部屋を模様替えするための壁紙まで……。数泊滞在するだけの部屋にそのような様子を見れば、おかしなことだと思うでしょう。一時的にしか滞在しないような場所に、自分のすべてを費やすことが愚かだとわかっているからです。一時的なところに自分自身のすべてを注ぐことが賢くないとわかっているからです。

費やすのであれば、いつまでも自分が住む本当の家のために費やすべきだと私たちは知っています。それと同じことです。みことばが私たちに教え続けてくれていることは、私たちの本当の住まいは、この世ではないということです。キリストによって贖われた者たちの本当の住まいは、今のこの世ではなく、やって来る「**新しい天と新しい地**」にあります。ですから私たちは、その先に目を留めることです。私たちはもう、望みのない人たちのように悲しみに沈む必要はありません。いや、悲しみに沈むべきでもありません。たとえ試練や困難の中にいる時でさえ、私たちはただ絶望してあきらめる必要はありません。あきらめるべきでもありません。私たちは、この地上にあって唯一、良い時も悪い時も、楽しい時も苦しい時も、変らずに喜びを持って生きて行くことができます。希望を持って生きて行くことができます。なぜなら、先に来るものを知っているからです。後のものに目を留めるからです。

ご自分が天に帰ることをご存じだったイエス様は、弟子たちに約束していました。ヨハネ１４：３で「**わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。**」と。イエス様が約束していた「**わたしのいる所に……おらせる**」

その永遠の住まいに、私たちが住む時は、いつかやって来ます。見たことのない新しい天と地、永遠にともにいてくださる神様、そして神様にある完全な慰めと喜びの時は、一日一日近づいています。それならこのすばらしい約束に目を留め続けることです。神様に会うことがわかっているのであれば、その神様の前に価値あることを求め続けていくことです。残された地上での生涯は、もう身近に迫っています。終わりが近づいています。短い時間で何をするでしょう。私たちにできることは、将来の希望であるすばらしい約束を与えてくださった神様に感謝して、この方の栄光を現わすために生きて行くことです。